

「道德」の源泉としてのムハンマド(一)

——イスラム教徒にとってムハンマドとはいかなる人か?——

保坂 俊司

一、序章

- (一) はじめに
 - (二) 道德とは?
 - (三) モラルは何故「道德」となったのか?
 - (四) イテオロギーとしての「道德」
- 二、預言者ムハンマドの生い立ち
- (一) 前預言者期——不幸な生い立ちと幸運な結婚
 - (二) 預言者への道
 - (三) 苦渋の逃避生活と凱旋
 - (四) 革命としてのイスラム社会の構築
 - (五) イスラム共同体の完成とムハンマドの死

一、序章

(一) はじめに

イスラム教やその文化に対して歴史的に馴染みの薄かった日本人には、イスラム教の根本とも言えるムハンマド(五七〇年ころー六三二年ころ)の存在、そしてそのイスラム教における位置付け、さらにはイスラム教徒一般のムハンマドへの敬愛の深さを理解することは、多少困難をとまなう。

本小論では、基礎的なイスラム教理解を目的として、以下に於いて数回にわたりイスラム教の宗教的特徴について検討する。特に、イスラム(以下原則として、イスラム教及びイスラム教徒を含めた場合は、イスラムと略記する)における道德の位置付けを、イスラムの開祖ムハンマドの存在との関連を中心に検討する。その際、中心テーマは、イスラム「道德」の源泉としてのムハンマドという視点を中心に扱う。

周知のように、イスラム教はアラビアのメッカに生まれたムハンマドという一人の男性によって開かれた宗教である。現在世界に少なめに見ても十二億人前後、おそらく十三億人に近いイスラム教信者が居ると推定される。概算にして、世界の人口の二〇パーセントということである。

この巨大な信仰集団は、たった一人のムハンマドのイスラム宣教に拠って生み出された集団である。従って、イスラム教の始祖としてのムハンマドに対するイスラム教徒の敬愛の念の篤いことは、論を俟たない。がしかし、それ以上にイスラム教はムハンマドの存在を重視する。

詳しいことは、いずれ検討するが、イスラム教徒にとってムハンマドは、信者たちの長であり、イスラムという宗教の教え、つまり、イスラム教における救済規定、特に実践倫理の制定者であり、その最初の実践

者(その行為がスンナであり、纏められたものがハディースである)であったからである。

イスラム教徒は、ムハンマドの教えのみならず、その日常生活の一切を模範とし、彼の説教・実践行為の全てを自らの日常生活、宗教生活における行為規範の源泉とする、という独特の行動原理を持っているのである。つまり彼は、イスラム教徒にとって宗教的救済法の源泉、社会的な法の源泉、そして道德の源泉なのである。

その意味で、イスラム教は同様にセム族の宗教であるユダヤ教、つまり「レヴィ記」の如く日常生活に支障が出るほどに細かな行為規定が、聖典によって定められているユダヤ教とも、また、救済の約束(福音)のみが定められており、実際の日常生活における具体的な行為規定が殆ど定められていない、キリスト教とも異なる独自の行為規範の体系を持つ。

さて、イスラム教徒にとってムハンマドの存在は全ての価値の源泉である。その意味でイスラムの価値は全てムハンマドの言行に起因する。その考えを象徴的に現わす言葉がタウヒードである。

イスラムを理解するためにこのタウヒードの思想は重要である。

(二) 道德とは？

さて、本題に入る前に「道德」について若干の考察を行なうこととしたい。まず、「道德」について、簡単に整理してみたい。というのも、このような大きな問題を議論するということは、それなりの準備が必要だからである。

道德という言葉の辞書的意味は、「ある社会で、その成員の社会に対する、或いはその成員相互の行為を

規制するものとして、一般に承認されている規範の総体。法律のような外的強制力を伴うものではなく、個人の内面的なもの」(「広辞苑」)。さらに、「社会現象ないし事実としてみれば、道徳はある時代に、あるグループによって承認されたる行為の準則の全体である。従って、道徳は習俗と最も密接な関係をもつ。(中略)道徳は時代とともに変遷し、民族、地域によって異なる。またこの関連において道徳は外的な強制を伴い、法や人倫的しきたりと接触する。しかしまた個人の意識や意志に働きかける内的規範としてみるならば、道徳は無条件に普遍的に妥当するとみなされる行為の準則の全体である。道徳はこの側面において寧ろ宗教的な戒律と密接に関係する。善悪の判断基準となり、行動へと駆り立てる主体的動機としての道徳は、宗教に培われた、あるいは各人の人生遍歴において信念として定着したエートスに基づいている」(平凡社「哲学事典」)。やや長い引用になったが、これを整理すると道徳とは「一、一定の社会において共有される行為の準則。従って、ある種の地域性や時代の限定が認められる。二、人間の内面的な規範を作るものとして、宗教的な価値観と密接に関係する。」という二つの側面がある。後者の意味では、道徳は地域や時代、民族というような限定を超えて普遍性を持つことになる。

これを仮に個人と社会、内面と外面という要素で考えると次のようになろう。つまり、道徳は、個々人の内面的な価値を形成するもので、その個人が属する社会全体に共有されている価値観をいう。そして、その価値観は、内面のみならず最終的には個人から社会全体を体系的に結びつける規範となる、ということである。

しかも、それが特に普遍性を持った場合、つまり個人の経験などから導き出されたとしても、その個別性を超えて、時代、地域を越えて多くの人々に受け入れられるものもある。一般にこのような普遍性を持った道徳は、普遍宗教をその源泉とするか、少なくとも普遍宗教と深い関係がある。

ところで、筆者はこれまで「道徳」という言葉に対して、なんら反省せず用いてきた。しかし、実はこの道徳という言葉は、以下のように、古語を換骨奪胎して英語の MORALITY の翻訳語として明治中期に形成されたという歴史がある。しかも、その背後に近代日本の一種のイデオロギーがあり、その意味を確り理解しておかないと、非常に分かり難いものとなる。従って、以下に於いてはまず、この熟語としての「道徳」の形成史を簡単に説明しよう。

(三) モラルは何故「道徳」となったのか？

まず、熟語としての「道徳」というものは申すまでもなく「道」と「徳」とが合わさったものである。まず「道」とは白川静氏の『字統』では「首と辵に従う。古文の字形は首と寸とに従うが、金文に辵と首と又に従う形の字に作り、のちの導の字にあたる。首を携えて道を行く意で、おそらく異民族の首を携えて、外に通ずる道を進むこと、云々」とある。これは物騒な解釈であるが、道は外の世界と内との間を結ぶもの、更に両者を安心して通ずることの出来るもの、という意味合いがある。故に「このように啓かれたものが道であり、人の安んじてゆくところであるから、人の行為するところを道といい、道徳・道理の意となる。」と説明がある。一方、徳は、同書によれば「彳と省と心に従う。省は目の上に呪飾をつけて、省道すなわち除道を行なう事を意味する。……、(呪飾をつける)と呪力が身につく)その人に固有の、内面的なものであることが自覚されるに及んで徳となる」となる。これをあわせると、道徳という言葉は、まさに「超越的(普遍的)なもの、よりよき生き方に、通じる方法」というような意味が認められる。つまり何らかの宗教

性を基としている、ということである。

ところで、現在我々が用いている「道徳」の用例は、『続日本書紀』の「道徳、仁義、因礼……」が、最も古い部類の用例とされる。もちろん、漢字としては、『史記』の老子伝が最も古い部類の用例のようである。しかし、これらは現在我々が用いる道徳とはその意味が、微妙に異なる。なぜなら、現在語の「道徳」は、明治以来の翻訳語の性格が強いからである。

まず、現在の意味での「道徳」つまりMORALITYの用例は、中江兆民の『国会論』（一八八八年）に「人間社会中最も尊重なる最も威勢ある法律即ち道徳の命ずる所なり」などという用例が最も古いとされるようである（大日本国語辞典）。

ところで、MORALITYは、日本初めての英和辞書であるヘボンの『和英語林集成』（一八六七年）では、「道、道理（原文はローマ字表記）」と翻訳された。

そして明治以前の「道」は、一定の人生目標——勿論それは利己的な目標ではなく仏教などの教えに根ざした利他・克己を基本とするのはいくまでもない——をもってそれに向かって精進努力する生き方、あるいはその世間一般の筋道、というほどの意味である。

また、日本人による最初の英和辞書所謂『薩摩辞書』（慶応四年、明治二年復刻）では、「作法、あるいは礼式、式作法の教え」と表記されている。それが、上のヘボンの第三版の明治九年版に「道、道理、礼儀、道徳、道義」と現れるようになる。

ちなみに、哲学术語を確定するのに極めて大きな役割を果たした井上哲次郎の『哲学字彙』（明治十四年版）には、前述の辞書と同じように「道義、行状」などが用いられ、漸く明治四十四年版において、道徳、

倫理という言葉が、用いられることとなった。

しかし、現在の「道徳」の意味を考える上で、更に重要なのは明治二十三年の「小学校令」における「道徳及国民教育の基礎並その生活に必須な……」というものである。この場合の道徳、つまり大日本帝国の国（正確には臣）民として実行すべき「道徳」の規定である。

（四）イデオロギーとしての「道徳」

現在の日本人の道徳といった場合には、この道徳は、所謂『修身』の教科書で言われた「忠孝」一如的な道徳観が、基本となっている。だから、一般的な日本人は国家、あるいは所属組織への忠誠を道徳にオーバラップさせる。つまり、日本人の道徳は、帰属社会への従属意識が強く、帰属集団を超えた普遍的な道徳基軸は、一般に希薄である。つまり「国家を超える基軸をもたない国民」などと日本人の特徴を表現される日本人の道徳観は、日本という閉ざされた社会において共有される地域道徳に偏る傾向が強い。

特に、普遍宗教である仏教を排除して民族宗教である神道を日本社会の精神の中心に置いてきた近代以降、この傾向が強い。

そこにはあえて伝統的な見地からいってMORALITYとはほぼ同義語の「道」を用いずに、「道徳」なる言葉を採用した明治の知識人の意欲を読み取ることが出来る。

一方、道徳としばしば混同される倫理、正確には倫理学（ethics）は、『薩摩辞書』では「躰方、修身齊家の教え」となっているが、『哲学字彙』には、「倫理学」となっている。ヘボンでは第三版になって初めて採用され「道徳学、修身学」となっている。

また『大日本国語辞典』では「人間関係や秩序保持の道徳」といい、所謂道徳の社会規範部分が特に、倫理と呼ばれるとの解釈を示している。尤も、道徳と倫理の違いなどについては、かなり恣意的な用い方がされているようである。

つまり、現在の日本語における道徳、あるいは倫理には宗教的背景が存在しないか、希薄であるということである。精々存在しても国家維持のための規範に止まる。

このこと自体は、決して非難されるべきものではないが、しかし、これから検討するイスラム教の道徳観とは大きく異なるという意味で、上述の日本の道徳観の特徴とその限界を理解しておく必要がある（但し、広池博士がいう最高道徳の概念は、本来の道徳のもつ普遍性を希求している点で、注目される）。

いずれにしても、「道徳」という言葉で表される対象としての日本的「道徳」とこれから検討するイスラムにおける「道徳」とは、その根本、出発点が異なるということに、注意が必要である。

この相違を十分に理解しておかないとイスラムにおける道徳の意味、さらにはその源泉であるムハンマドの宗教上の位置は、理解し難いのである。

そして、この違いを理解した上で、道徳と宗教との関係も考慮されなければならない。なぜなら、日本近代のように社会道徳と個人道徳を分離し、「宗教」を個人の心理領域に封じ込めて、社会道徳と切断、あるいは半ば孤立させた道徳体系と異なり、イスラム世界では所謂道徳は、イスラムの教えそのものから必然的に生み出される、あるいはイスラムの信仰と生活との密接不可分性の内に道徳は成立するものであるからである。

本小論は、このイスラムと宗教、道徳の関係について検討する事を目指すものである。この議論は次回以

降本格的に検討する。

イスラムに於いては「信仰生活」・「社会生活」この全てが宗教に、つまりムハンマドが啓示された（といスラムの人々が信ずる）諸々の規定に基礎を置く。

その宗教的な構造は、日本人の宗教観とは大きく異なり、まさに宗教が全てを支配する世界である。そして、その中心にムハンマドの存在がある、という構造をしている。これがイスラム教である。

二、預言者ムハンマドの生い立ち

(一) 前預言者期——不幸な生い立ちと幸運な結婚

ムハンマドの人生は、多くの宗教者の人生に典型的に見られる不幸な人生であった。彼は、メッカの名門とされるクライシュ族の一員として生まれはしたが、父は生まれる前に亡くなり、また母アミーナとも六歳の時に死別し、さらに父の如く育ててくれたハーシム家の家長であるアブドゥアルムタルブ（祖父）をもその二年後に失う。

以来、彼は天涯孤獨の孤児となり、おじのアブー・タリーブのもとで育てられた。如何に、部族社会であり、部族の中では全てが兄弟同然に扱われるという建前があった古代アラビアであったにしろ、父という後ろ盾を失った孤児ムハンマドの少年期から青年期の境遇は、厳しいものがあつたことは想像に難くない。

このような不幸な身の上であつたためか、彼は万事に控えめで、思慮深い商人に成長していった、と思われる。数十年後における彼の預言者としての行動を見ると、その駆け引きの上手さ、思慮深さ、そして大胆

さなど、よく計算されたものを感じざるを得ないが、そのような才能は、孤児という境遇の下で形成されたものではなかったか？

不幸な生い立ちであったムハンマドではあったが、彼の誠実な人柄が見込まれてメッカ随一の寡婦にして資産家のハディージャの求婚を受ける事となった。時にムハンマド二十五歳、ハディージャ四十歳であった。この結婚によって生活の安定と家庭の幸せを手に入れたムハンマドは、彼女との間に三男四女をもうけた。

しかし、男の子は全て夭逝し、四人の女の子だけが残った。ムハンマドの落胆は大きかった。というのも、男性社会のアラブにおいて跡継ぎである男の子を残せないことは、大きな悲しみ、苦しみと考えられていたからである。尤も彼は、甥のアリーを養子にしており、また娘の一人を彼に娶わせていたので、跡継ぎに關しての憂いはなかった。

そのような平穩な日々が突如崩れたのが、ムハンマド四十歳のときのある出来事であった。神からの啓示が彼に降りたのである。ムハンマドがメッカ郊外のヒーラーの洞窟で瞑想していた時の出来事である。その時彼は、予想だにできなかった啓示体験を受ける。

(二) 預言者への道

ムハンマドの時代、メッカの人々は、一定の年齢になると世俗を離れ一定期間隠棲するという習慣があった。ムハンマドもその習慣に従って、毎年一ヶ月間ほどヒーラーの洞窟に籠もり、祈りと瞑想の日々を送ったとされる。富裕な妻との結婚で得た平安な日々の中で、ムハンマドは物質的に満たされる一方で、精神的

には何か満たされない思いを抱いていたに違いない。恐らく、経済的な安定が、男性社会のアラブにあって妻から与えられた、ということの社会的な評価に、大きな原因があった、ということは想像に難くない。そのような彼のもとに、神から次のような言葉が下ったとされる。

これ、外套にすっぽりくるまったその者、さ、起きて警告せい。己が主はこれを讃えまつれ。己が衣はこれを浄めよ。穢れはこれを避けよ。褒美欲しさに親切にするな。

(辛いことでも) 主の御為に耐え忍べ。(「コーラン」七四、一一七)

あるいは、

誦め、「創り主なる主の御名において。いとも小さき凝血から人間をば創りなし給う。」

誦め、「汝の主はこよなく有難いお方。筆持つすべを教え給う。人間に未来なることを教えたまえり。」

(「コーラン」九六、一一五)

であったとされる。

この時の啓示は、セム的な預言者に共通なことであるが、本人の意識や事情は全く関係なく、神が選ぶというスタイルをとるために、ムハンマドにとってこの啓示体験は、まさに青天の霹靂であった。彼は、預言を伝える天使ガブリエルの姿に怯え、気は動転し、脂汗を流したという。この時六一〇年のラマダーン月の

カデイルの夜であったとされる。

以来、ムハンマドが亡くなるまで、啓示が下る時にはほとんどの場合、この様に精神的にも、肉体的にも激しい緊張をムハンマドは強いられたという。

しかし、初期のムハンマドにとって啓示とは、このように突然押しかかるもので恐怖以外の何物でもなかった。彼は、はじめ当時長く存在した神懸りたち同様に、悪魔或いはジン（妖霊）が自分に乗り移ったと自らを疑ったという。

ここで、神は自らの命令を人々に伝えるべく、神はムハンマドに向かって、触れ先が王の命令などを大声で読み上げるように、自らの命令を「誦（よめ）イクラー」「読む」はアラビア語でクラー。ちなみに、これが『コーラン』の語源」と命令した。

彼は、あまりの恐ろしさに息も絶え絶えに帰宅し、以後三年間預言者としての自覚が生まれるまで、まさに恐怖と絶望の日々をおくった。つまり、神の預言者としての確信と自覚が未だ出来なかったからである。

それは裏を返せば、預言者とはそれほどに厳しい試験に遭わねばならない境遇を意味する。ムハンマドは、漸く手に入れた人並みの幸せを失う決意が出来なかつたのである。

しかし、その間にも 神の啓示は次々と下される。

クライシュ族をして無事安泰に、冬の商隊、夏の商隊の慣習を守らせ給う（アッラーのお恵み）のゆえに。みな、この家の主にお仕え申すがよい。もともと彼らには食を与えて飢えから救って下さったお方。彼らの心を安らかにして怖れを除いて下さったお方。〔コーラン〕一〇六

この時代のムハンマドの関心は、自らが属する部族、あるいはメッカの人々に、自らが預言者である事を認めさせることにあつた。しかし、唯一神アッラーへの信仰を主張し、多神教徒であつた人々を非難するムハンマドの宣教は、多くの人々の反感を買うこととなる。彼は嘘つきとして非難された。というのも、伝統的なアラブの信仰は、多神教であり、各部族が、それぞれに自部族の神を持ち、これを祭っていたからである。

しかも、それらの信仰は、自らに都合のよい、現世利益信仰で、素朴なというより未開な信仰形態であつた、とされる。

だから、そこには共同体的な倫理観はあつても、個々人の生き方としての倫理は希薄であつた。

ええ呪われろ、よるとさわると他人の陰口、宝を山と貯めこんで、暇さえあれば銭勘定、これだけあればもう不老不死と思つてか。〔コーラン〕一〇四

これどう思う、お裁きをうそ呼ばわりする者がある。ああいう者は、孤児とみれば邪慳に追い払い、貧者の養いにも気乗り薄。ええ呪われよ、あの者どもは祈りはしても祈りに一向に身が入らず。〔二〇七〕

という次第である。

この一文からも理解できるであろうが、当時のアラビアの信仰は現世利益追求、目前の利害を重視する傾

向が主流であった。そのような社会において、個々人の道徳的な行為が重要であり、財貨や多神（女神含む）の存在を否定することは、信仰のレベルのみならず、社会の根本の否定を意味した。故に、保守派の人々からムハンマドは大いに弾圧された。

しかし、その一方で、彼の信奉者も確実に増えてゆく。その結果、新興宗教者ムハンマドと既成宗教者との対立は激しさを増す。その結果、伝統宗教者たちの対立となる。そこに、アラブ世界の、否世界如何なる所でも基本的には、同様であるが、宗教間というより存在の拠り所としての価値観の対立が起こる。しかもそれは熾烈な戦いとなる。尤も、ムハンマドは新興勢力でありその力は微々たるものであった。彼は劣勢に立たされる。その苦しい境遇は、

腐ってしまえ、アブー・ハラブの手。ええ、すっかり腐ってしまえ。家産も役に立つものか、儲けた金も甲斐あるものか。燃える劫火に焼かれるばかり。焚木は女房が背負ってくる。首に荒縄結いつけて。

〔コーラン〕一一二

という一節にも現れている。

この啓示が下された頃のムハンマドは、四面楚歌の状態であり、命さえ狙われていた。それはムハンマドが、伝統宗教を全否定し、自らに下った啓示による宗教、つまり唯一神とその神の預言者としてムハンマドを崇めることを主張したからである。つまりそれは、それまでの社会伝統を根源的なレベルから破棄し、新

しい社会秩序を形成する事を意味していた。まさに革命、というより革命を超えた創造であった。しかもその神は、怒る神、ねたむ神、恨む神であった。

ええ憎らしい人間め。何たる恩知らず。一体、何から創って戴いた身か。〔コーラン〕八〇―一六

この神は、最後の審判を行う。そして自らの指示に従わぬ者を地獄に落とすという。

太陽が（暗黒で）ぐるぐる巻きにされる時、星々が落ちる時、山々が飛び散る時、〔中略〕天がめりめり剥ぎ取られる時、地獄がかつと焚かれる、〔中略〕大空の裂け割れる時、星々の追いつ散らされる時、四方の海、かたみにどうと注ぎ込む時、全ての墓が発かれる時、どの魂も己が所業を知るのであろう、為たことも、為残したことも。〔中略〕

正しい信者は至福の園に、極道者は火の竈に。裁きの日には丸焼きとなり、抜け出そうにもそうはいかない。〔中略〕全ての主権はアッラーの御手に。〔コーラン〕八一―八二

ムハンマドがこのような新しい宗教を主張したことによって、ムハンマドと伝統主義者達との間で一種の宗教戦争がはじまった。

言うがよい、「これ、信仰なきやからよ、お前らの崇めるものをわしは崇めない。わしが崇めるものを

更に

お前らは崇めない。お前らが崇めて来たものをわしは崇めとうない。
お前らにはお前らの宗教、わしにはわしの宗教」と。(『コーラン』一〇九)

ええ、呪われよ、何たる案をねり出したことか。も一度呪われよ、よくも見事な案をねり出せたものよ。ちよと眺め、眉ひそめてしかめ顔、それから後ずさりして、傲然と、「これがどう見ても伝来の妖術だ。どう見てもただの人間の言葉だ」という。

よし、あの男、地獄の劫火で焼いてやる。さて、劫火とは何かとなんで知る。一物も残さず、一物もあまさず、皮膚をじりじり焼きとおし、十九(の天子)が番をする。(『コーラン』七四)

という具合である。ムハンマドを攻める側は、もはや彼を生かしておくことが出来ないほどに、彼を憎み、敵意をむき出しにした。

勿論、『コーラン』の言葉も、このように過激というより憎しみにあふれている。日本的な伝統では、宗教家の発する言葉ではない、という印象を受けるであろうが、このような命がけの宗教間の抗争は、日本人の考える宗教対立とは、意味が全く異なるのである。しかもイスラムを含むユダヤ・キリストの各宗教では、修行によって完全なる人格、道徳の実践によって人間社会のよりよい生きざまを求めるといふ意識は、神の救済からみれば二義的である。故に、道徳の意味も大きく異なる。

いずれにしても、ムハンマドの起した宗教は、当時のアラビアにおいては革命的なものであった。

それまで一般的だった多神教に対して唯一神を主張し、しかもその神は人間の創造主であり、人間の操り人形のように、適当に拝めば、恩恵(例えば、神社に賽銭を投げて願いをかなえてもらおうとするような感覚)がもらえるような、そんな気安い神ではない。まさに、それは非難、中傷のレベルから迫害、そして暗殺未遂というところまでエスカレートする。

伝説では、ムハンマドはラクダの胃袋に閉じ込められて危うく死にかけたこともあったという。それでもムハンマドの預言者としての決意はびくともしなかった。彼はひたすら周囲の嘲りや罵倒に耐え、神の言葉を伝えた。

しかし、迫害が激しくなればなるほどに、彼の信奉者も徐々に増えていった。そこにはメッカの社会問題ともいえる貧富の差や部族・氏族間の対立抗争が、背後にあったとされる。

ムハンマドの信奉者の数が無視し得ないほどの数になるにつれ、彼への弾圧は激しいものとなり、ついに彼はメッカから逃避する事を決意した。所謂ヒジュラ(聖遷)である。アラブ人にとって故郷を追われることは、部族の保護を失うことであり、社会的死を意味するほどに重い意味を持っていた。

しかし、そこまで彼は追い込まれても、神の預言者・使徒としての確信と義務感、揺らぐことがなかった。否、一層その決意は深まった、ということであろう。彼は、命がけでメッカを脱出し、メディナへとおちのびていった。西暦六二二年の七月六日のことであった。

そのときには、裕福であった妻もその財産も全て失っており、彼もまたその支援者も塗炭の苦しみを受けていた。それもこれも神の預言を受けたという只一つの事実が招いた悲劇であった。

彼は私利私欲のために神の預言者を騙ったわけではない、心底から人々の真の救済を目指して警告を發したのである。「コーラン」には、

汝はただ（生きた人間に）警告をしておればそれでよい。我ら真理を持たせて汝を遣わしたは、（人々に）喜びの音信を伝え、また警告を与えさせるため。従来とても、いかなる民族のところにも必ず警告者が行つておる。（三五一―三三）

従つて、彼は決して自らの欲望のために、自らの地位を用いることはなかった。彼は、預言者としてアラビア半島にイスラムを広めるめどのついた六三二年に亡くなるが、そのとき彼の残したものは、わずかな武器と身の回りの品々であつた、と言ひ伝えられている。彼は望めば、当時想像し得る如何なる富も手中にすることが出来たのである。

ここに、ムハンマドの預言者としての自覚とともに、彼が預言者として慕われるゆえんが有る。

（三） 苦渋の逃避生活と凱旋

故郷メッカを追われたムハンマドは、メッカから四〇〇キロほど離れたネディナに移住する（これをヒジュラと呼ぶ）。彼はメディナの住民に一種の裁定者として迎え入れられるが、その生活は、想像を超える厳しさであつた。というのも、オアシス都市における余剰は少なく、ムハンマドおよび、その賛同者数十家族（彼等をムハジールンと呼ぶ）を財政的に養うことは、受け入れる側も大きな負担となつたからである。

また、メディナにはユダヤ教徒も多数おり、彼等がムハンマドに敵対するという状況があつた。従つて、ムハンマドのメディナ生活は、決して平穏なものではなかつた。その中で、彼は新興のイスラム社会を育成していかねばならなかつた。そのため苦渋は、彼の双肩にかかつていた。特に、移住者たちの生活の糧を稼ぎ出すため、ムハンマドは奔走しなければならなかつた。

なぜなら、彼は神の使徒として預言を伝え、それに呼応した人々が、結果的に生活基盤も失つたのである。ムハンマドは新興のイスラム団体（ウンマ）の長として、彼等を導く義務を負うていたからである。

そこで、彼が実行したのが、メッカの商隊の略奪であつた。日本では略奪というと非合法で、卑怯な犯罪の如くであるが、イスラム世界は、元々遊牧社会であり、このような行為が歴史的に容認されていたのである。

そこで、ムハンマドは、これを

不当な目に遭わされた者が、相手に敢然と挑みかかるとはお許しが出ておる。そういう人たちはアッラーが助けて立派に勝たせて下さらう。すなわち、なんの罪とがもないのにただ「我らの主はアッラーだ」と言うだけの理由で住居から逐い出されたようなひとたちのこと。アッラーのおはからいで、人間がお互いに撃退し合うようになっていなくなつたなら、修道院でも教会でも礼拝堂でも、およそアッラーの御名が盛んに唱えられるような所はみな完全に壊されていたことであろう。だが、アッラーは、御自分に味方する者を必ず助け給う。まことにアッラーはお強くてお偉いお方。（二二―四〇）

と、説明し正当化する。

日本人にはなかなか理解し難い言説であるが、ムハンマドの置かれた立場が如何に厳しいものであったかを示す一例である。勿論、それはアラビアの伝統に従ったものであった。

ムハンマドにとってメデイナ移住直後の生活は、非常に苦しいことが多かった。それは彼がイスラムという宗教組織を具体的に形成する時期であったからである。

それまでムハンマドは、イスラム教団を作るといふ積極的な必要も、また意志も持っていなかったようである。しかし、生まれ故郷を放逐され生活基盤の殆どを失った彼が、先ず取り組まねばならなかったことは、自らと自らに従ってメデイナに移住してきた弟子たちの生活の保障、そして異郷においてイスラムの信仰を守ってゆくための、教団組織の形成とそれに不可欠なイスラム独自のシステムを徐々に形成していった。

その典型が、ギブラ（礼拝方向）の変更である。

人々のうち愚かな者どもは言うであろう、「なぜ彼らは、以前にむいていたギブラから向きを変えたのか」。答えるがよい、「東も西も神のもの。神はみ心にかなう者を正しい道に導き給う」と。かくて我らは汝らを真中の民族となした。汝らをしてすべての人々の証人となし、かつこの使徒をして汝らの証人となさんぐために。以前にお前が採っていた祈りの方角を我らがあのように（アッラー）があのように（イエルサレムに向けて）定めたのは、あれは元来、本当に使徒について来る人と、背を向けてしま

者どもとはつきり見分けるための方便だったのだ、いや勿論、これは容易ならざる事態では有るが、しかしそれとて、アッラーの御導きを戴いておる人々には何でもありはしない。そうしてアッラーが汝らの信仰を無になさるものか。アッラーは人間に対し限りなく優しく慈悲深いお方なのではないか。
 【コーラン】二一三三―三三八

礼拝の対象をユダヤ・キリスト教徒同様に、イエルサレムにしていた初期のイスラム共同体の儀礼を、メッカに変更するというような宗教的儀礼の根幹を変更してまで、イスラムの独自性を主張しなければならなかったのが、この時代のムハンマドであった。

そのために最大用いられたのが、絶対の神アッラーの使徒という絶対の立場（『コーラン』二一四六あるいは二〇九）である。

苦境の中にあつて、イスラム共同体形成に腐心していたムハンマドは、使徒という立場を従来になく強調し、それを根拠に信者に絶対的な服従を要求した。結果として、ムハンマドを中心とする新しい社会組織としての、イスラム共同体が形成されることとなった。しかも、この新しいイスラム共同体（ウンマ）が、二十一世紀の今日十三億人のウンマを形成するまでに発展したのである。

但し、このイスラム共同体の形成は、従来の文化伝統の再構築を伴ったために、ムハンマドはウンマにおける一切を自ら形成せねばならなくなった。それ故に、『コーラン』によってなされる彼の教えのみならず、彼の日常の行動の一切が、新しい共同体の模範とせねばならなかったのである。これが所謂ムハンマドのスンナと呼ばれるものである。

そこには、日常生活の一切が克明に記録されている。その中には、用便の作法からセックスに関することまで多彩である。

つまり、イスラム教徒の生活の全てが、ここから始められているのである。

(四) 革命としてのイスラム社会の構築

既述のように、ムハンマドの提唱した教えは、政治・経済基盤を失った者達の自立の法を創出する、という切羽詰った状況や、アラブ独自の宗教意識、つまり素朴で、熱狂的な宗教風土を基盤として形成された。加えるに、ベトウィン独特の部族的習俗によって、独自の軍事集団としての部族的な基盤宗教的理由のみならず、政治・経済的合理的理由でも小さくなかった。というのも、イスラムの考え方は、宗教を中心に政治・経済・軍事すら出来上がっていたからである。「コーラン」ではこれを「我らは汝を、喜びの音信を伝えるため、また警告を与えるために、真理を持たせて派遣した。」(二一三)と表現している。

故に、彼の決定は、絶対善とみなされる。神への服従は、ムハンマドへの服従(イスラーム)と同義語であった。(詳しくは、次回に検討。)

ここにムハンマドは、神の預言者(nabi)であり、その言葉を社会に生かし、社会を改革することを使命とされる使徒(rasul)、そしてこの世の調停者として、さらにそれらを一括する意味でのイスラム生活の構築者としてのムハンマドがある。

ムハンマドが既存の社会の破壊者、新しきイスラム社会の制定者であることを象徴する出来事は、聖なる月における略奪である。そして、この伝統破壊行為に対する次の啓示によって、新しいイスラムの価値体系が明らかとなる。

神聖月について、その期間中に戦争することはどうかとみながお前に訊きに来ることであろう。こう答えるがよい。神聖月に戦つたりするのは重いつみだ。しかし、アッラーの道から離脱し、アッラーやメッカの聖殿に対して不敬な態度を取り、そこから会衆を追い出したりする方が、アッラーの御目から見れば、もっと重いつみになる。騷擾は殺人よりもっと重い罪だ、と。(「コーラン」二二二四)

ムハンマドは、このようにアラブの伝統において禁止されていた神聖月における戦闘行為の禁止という伝統的な掟を一応認めつつも、イスラム教徒は、その掟を必ずしも守らなくてもよい、という二重基準を与える。

つまり、この啓示には、アラブの伝統を一応認めるという立場と、その上でイスラム集団は、このアラブの掟に縛られるものではない、という意味で新しいムスリムの基準を提示したことになる。ここにも、新しい規範制定者としてのムハンマドの存在が象徴的に見出せる。

さて、新興のイスラム共同体は、生活から宗教に至るその基準の一切をアラブの伝統に基礎を置きつつも、そのつどムハンマドの判断によってそれらを取捨選択し、また改変して新しい規範を構築していった。その詳しいものは、後に検討するが、彼は、次々に超アラブ的な規範を制定していった。

次に、宗教上の儀礼について検討する。

(五) イスラム共同体の完成とムハンマドの死

メッカにおける十余年の生活は、ムハンマドにとっては戦争と反乱、そしてイスラム共同体構築のために緊張の日々であった。非イスラム教徒から見ればそれは権謀術数の日々とみえるが、イスラム教徒にとっては、まさに奇跡の日々であった。彼は圧倒的に不利なバトルの戦いに於いて大勝し、また、大敗したウフドの戦いにおいても、ムハンマドは、イスラム共同体への信徒達の帰依を逆に獲得していった。

特に、ウフドの大敗後、彼は寡婦や孤児の増加という、大きな社会問題に直面することとなり、妻を四人までもてるという有名な婚姻制などを定めていった。イスラムの婚姻制度は、実はそれまで母系制が強かつたらしく、一妻多夫制も決して珍しいものではなかった。

そのアラブ社会において、父系制を確立したムハンマドの教えは、社会構造の根本的な変革であった。その社会改革を変化させることになったのが、このウフドの戦いであった。このように、ムハンマドはアラブ社会の構造的な変革を伴うような大事件を見事に解決し、結果として伝統的アラブ世界とは、大きく異なるイスラム社会を形成した。

だからこそ、イスラム以前のアラブを、ジャヒリヤ（無明時代・無道時代）とイスラムの人々は呼び、区別するのである。

しかし、アラブとイスラムを隔てる最大のものは、やはり宗教、つまりイスラムの教えとその実践にあるう。

つまり、従来多神教で、呪術や現世利益追求で、呪術的な宗教、それも各部族がばらばらに、まさにトーテム信仰レベルに止まっていたアラブの宗教界を、唯一なる神、アッラーによって統一しようというその目論見は、まさに当時のアラブ人には驚嘆すべきものであり、また恐怖の存在でもあった。

しかし、彼は、これを強行した。特に、別離の巡礼と呼ばれる最後のメッカ巡礼は、後のイスラム教徒の祈りや、巡礼の作法を決定する重要なものとされる。

この時、つまり六三二年三月ムハンマドは四万人もの信徒を連れてメッカへの巡礼を行なったが、その時にメッカのカーバ神殿に飾られていた各部族のトーテム神は尽く破壊されたことは、後々のイスラム教の偶像破壊行為の起源となる。

また、カーバ神殿に祭られた黒石を中心に回るタワーフ、悪魔に見立てたジャムラという石に小石をぶつける儀式など、多くの作法がこの時決定されそれは今日でも、厳格に守られている。

別離の巡礼を終えたムハンマドは、同三月末にメディナに帰還し、程なくして没する。これによって、イスラムの規範の源泉は永遠に閉ざされた。なぜなら彼は自らを預言者の打ち止めと自らを位置づけたからである。

さて、以上がムハンマドのごく簡単な一生である。このアラビア半島のメッカというオアシス都市に生まれた一人の男が、やがて預言者・使徒として苦難の末イスラム社会を確立する過程をごく簡単に紹介した。

次回以降、このムハンマドによって作られたイスラム社会とは如何なるものか、その道徳律はどのように形成され、またどのような特徴を持つかについて、具体的に検討してみよう。（以下次号）